



# 鎮守の森だより

NPO 法人 社叢学会ニュース  
第2号  
2003年3月20日

## 縁結びの神木 “<sup>れんり</sup>連理の<sup>さかき</sup>賢木” ～鎮守の森と京の七不思議～

社叢学会は昨年5月26日に、京都の賀茂御祖(下鴨)神社社の森研修道場において設立総会を開催し誕生しました。当学会設立の舞台となった社の森は、高野川と賀茂川が合流する三角洲上にあり、森の中には奈良の小川、瀬見の小川、泉川、御手洗川の清流があります。約3万6千坪の面積があり、樹木が鬱蒼と生い茂るこの森は原生樹林の植生を残し、森全域が国の史跡に指定されています。また、数々の社殿群とともに世界文化遺産にも登録されています。木々につつまれた参道を進むと正面に鮮やかな朱色の楼門があり、くぐると御本殿に到りますが、

その楼門の手前に縁結びの神さまとして有名な相生社があります。その傍らの玉垣の中に「連理の賢木」と呼ばれる神木があります。



連理の賢木



相生社

この神木は、相生社の神の靈験によって、2本の木が途中から1本につながり、縁結び、安産子育て、夫婦和合の御神徳をあらわす象徴とされています。もし、この木が枯れるようなことがあっても、この社の森のどこかに後継ぎが生まれるとの言い伝えがあり、現在の神木も四代目にあたります。この不思議さが京の七不思議となっています。

ちなみに森の中を流れる御手洗川も京の七不思議のひとつとされています。それは、この川は日頃は水が流れていないのですが、土用の日が近づくと水が湧き出るといわれているのです。

## 「青垣 山ごもれる」考 ～社叢文学の源流～

講師 片岡 智子

(ノートルダム清心女子大学教授)

「社叢」とは、マクロコスモス、ミクロコスモス、そのどちらでもないカミ（上）・オク（奥）という言葉があらわすただならない空間（これをインターコスモスと名づけることを提案する）で、日本はこのマクロでもミクロでもない「奥」（＝心の奥、空間の奥）という空間に、聖なるものを発見し、文化を築いてきたと言えよう。このような社叢こそが日本文化を読み解く鍵ではないだろうか。「奥の思想」については楨文彦氏のいわれているところである。

「社叢」とは、「社」が建築物に代表されるように人の手になるものを表わし、「叢」が森や草木すなわち自然を表すと考えられる。日本人は、単なる自然崇拜ではなく、自然に手を加えて土地を整え、社を作り、そこに神を祀ってきた。言い換えれば、社叢はアニミズムを文明化したもので、これこそ日本文化の特徴をなすものだといえる。

では、そのインターコスモスを表現する「社叢文学」はどこに見出されるのだろうか。『古事記』に、「倭は くにの真秀ろば（まほろば） たたなづく 青垣 山籠れる（やまごもれる） 倭し麗し」という歌謡がみられ、これが言葉として捉え得る最古の社叢文学だと思われる。この歌謡は死に瀕した倭建命が詠んだ国徳び歌で、『古事記』においては今の鈴鹿山脈あたりから大和の国を眺めた景色を詠んだものとなり、従来、「畳のように重なり合って垣根のようになった青々と茂る山に守られた大和は本当に美しい」と解釈されている。だが、実際に奈良へ行ってみると、この解釈には今ひとつ納得しがたいものが感じられる。また、『日本書紀』には景行天皇が九州で望郷の歌として詠んだ同様の国徳び歌として登場する。この二つの歌の共通点は、いずれも遠隔地から鳥瞰的に望んで大和を歌ったものとして捉えられていることである。これらはマクロな見方で解釈されたものだといえよう。

これらの歌謡は早くに上田正昭氏が『古事記』、『日本書紀』にあるように名だたる人が詠んだものではなく、民間の歌謡だったといわれているように、この歌謡は独立歌謡として捉えられるべきであり、そこからインターな見方が浮かび上がってくる。

以上のように本歌謡は、本来インターな視点で

読み解かれなければならない。そのように考えると「やまと」は「ヤマのトコロ」という意味で、「くに」は天や空に対する「土地」を表す言葉と解される。従って、「くにのまほろば」は土地の一番秀でたところということになる。次の「たたなづく」であるが、まず、「たた」は接頭語で「たたずむ」などと同じ「たた」であり、「なづく」は別の歌謡に「なづくき田」とあるように馴れる、従うの意味であり、木々が繁り、静かに親和してたたずんでいる様子を謡ったものと思われる。

次に「青垣」であるが、これは漢語ではなく和製の訓読された熟語で、垣をなす緑の木々を讃えるために創られた言葉だと考えられる。青々とした木々によって何かを隔ててそこを守るための「垣」と表現し、その聖性を帯びた山のこもったところがヤマトであり、美しいと讃えているのである。考えてみれば「青垣」の「青」は自然を、「垣」は人工のものをあらわしており、これは正に社叢の詩語に他ならないといえよう。

最後の「うるわし」であるが、これは端麗という意味であるが、語源は大野晋氏が指摘されたように「潤う」の「うる」と同じであり、みずみずしさを重要視する日本の美的感覚を端的に現す和語だといわれている。したがってここでのヤマトは青垣に囲まれた山籠れる奥処であり、そこは清水の潤う麗しい所だと謡っているのである。

近年、纏向遺跡で水の祀り場が発見されたが、これが三輪山の麓であることを考え合わせると、ここが「大和」の発祥地ではなからうか。大和を国名としたのも、そこに山があって、その清水が湧き出るところを象徴するものだったからであろう。ここには王権が成立する以前から、美しい山が存在しており、古代人は聖なるものと仰ぎ見ていたにちがいない。それを言葉で表現し水祭りの歌としたのが、この歌謡だったのではないか。これこそ社叢文学の源というべきであろう。

このように社叢というインターな命に根ざした世界を取り戻し、そうした眼差しで見ていくと、日本文化の、あるいは日本文学の根源的な諸相が解明できるであろう。

# 鎮守の森と家郷社会 ～日本の集落秩序を考える～

講師 藺田 稔

(京都大学名誉教授)

## 家郷社会・風土祭祀・家郷祭祀とは

家郷社会とは、風土や歴史が生まれ育った人のアイデンティティとなっている、ふるさと性のある地域社会のことをいう。社会学でいう地域社会が、今、現に生きている人間しか取り扱わないのとは異なり、家郷社会は「縦の線」である「歴史」を背負い風土を取り込んでいるといえよう。今そこに住んでいる人間にとってのみ便利なコミュニティーではなく、まわりの風土に潜む神々そしてまわりの自然を含めた社会が家郷社会なのである。この好例として、安藤広重の長崎湾の名勝図では、稲狭山という当時の神の山の麓に集落を持つという、まわりの風土を取り込んだ景観がみられる。

かつて日本列島は盆地単位に集落が形成され、風土祭祀という体系のもとに成り立っていた。そしてこの集落が氏神をまつり、毎年の祭りを繰り返して家郷性の高い社会をつくりあげ、家郷祭祀を形成した。この祭祀体系は、単なる気候風土ではなく人間の力が及んだ歴史風土であり、歴史が積み重なった精神的な風土である。風土祭祀を背景に、小さな家郷祭祀が営まれているのである。

## 偶像を持たない日本の神々

西欧や中国、インドなどの多神教がご神体として偶像を持つのに対して、日本も多神教ではあるが偶像を持たない。日本のご神体は霊であり何かに宿る形をとり、常時その姿を見せる訳ではない。むしろ、人間の方が、実体化した神を目にすることを畏れたのである。日本人の思想として尊いものは目に見えず、また目に見えないことこそが重要なのである。だから、神は人間の目に触れにくい「奥」に鎮まるのである。神とは自然の恵みを与えてくれる霊であるので、里からさかのぼった豊かな自然の中に宿っているのである。

## 日本・西欧の町・村の形成

普段は奥・裏に居る神を、祭りの時に、里に迎える。三輪山の例を見ると、集落の外側に鳥居がある。日本の集落は、公共のスペースが中央になく、どこに中心があるのかが分からないのである。日吉神社や飛騨大内などの例で見られるように、街道に沿って集落を持つ。日本の集落は向う三軒両隣と言われるように、道路沿いに広がる、道路を介したコミュニティーになっている。その紐状集落が重なって街村をつくる。そして小規模な街村体系は、東京にもまだ残っている。

西欧では、ギリシャの都市国家を例に挙げると、アゴラ（広場）を中心に街が広がる。ドイツ・ロマネスク街道でみられるように、町や村は広場的に集落を持ち、まわりは森で城壁がつくられ、それぞれは隔絶されている。この体系を広場村という。人間が神の使命を受け、神を中心とした人間の社会がコスモスであり、自然からコスモスを受ける日本の社会形成とは異なっている。

## 奥の思想と鎮守の森

建築家・槇文彦氏によると、「奥」とは見えない中核に向かう空間のベクトルである。その奥に神聖なものが在るという日本人の考え方が、鎮守の森を形成したのである。普段は、人間が参道を通して奥の存在に触れるのであるが、お祭りとは、何かに宿った神を、年に1、2回お迎えすることなのである。それでも、強い暗示であり、形は見えない。この日本人の神の捉え方は原始的なため明治期から日本学者から錆びれるのでは、と言われつつも続いている。それは、鎮守の森のよさが大きな要因となっているであろう。

この先祖が蓄えてきた価値の高い鎮守の森の文化を遺産として、さらに立派なものにしていきたい。

(文責：横山 恵子)

## 次回予告(第5回関東定例研究会)

日時：2003年4月26日(土) 14:00~17:00

場所：東京農業大学・世田谷キャンパス 18号館1階1811教室

(世田谷区桜丘1-1-1 TEL03-5477-2428)

テーマ：「社叢」雑感

講師：佐藤 大七郎 氏 (東京大学名誉教授)

# 書籍紹介

bookbookbookbookbookbookbookbookbookbook

## 「環境市民とまちづくり 1 自然共生編」

編集代表／進士五十八

自然環境を守るには、まず市民自らが行動しなければならないと考えている人が多い。しかし、どのように市民活動に関わってゆけばよいのかが分からないのが現状。本書は各分野で環境市民活動に携わった市民 13 人の体験を克明に収載し、「環境市民」への道筋がつかめるように編集されている。

ぎょうせい・定価 2,190 円（税別）

## 「週刊神社紀行」(全 50 巻)

歴史の年輪を刻んだ社殿の前にたたずみ、鎮守の森に抱きすくめられる——そんな心の旅のガイドブック・シリーズ。全国の著名な神社の歴史や風土、祭事、建築や神宝、さらには各神社周辺の観光地、土産物や名物料理までビジュアルに紹介。

学習研究社・各巻 560 円（税込み）

## 「大国魂神社の祭時記」

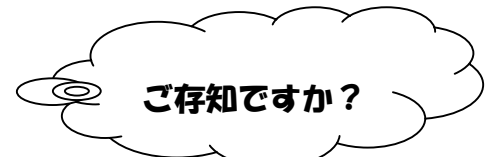
監修／大国魂神社・文／桜井信夫

東京都府中市に鎮座する大国魂神社は、千九百年

もの歴史と伝統を誇るといわれる。全国的に有名な「暗闇祭(くらやみまつり)」をはじめ、「すもも祭」や「くり祭」「杉舞祭」など、当神社ならではの四季折々の祭事を紹介。

ネット武蔵野・定価 1,143 円（税別）

Q?A Q?A Q?A Q?A Q?A Q?A



社叢学会のシンボルマーク

このシンボルマークは、社叢の一般的な構成を図式化したものです。まず公道からの入り口に一の鳥居があり、参道を進むと社殿(黒丸)のある境内地に到ります。この入り口には玄関としてのひときわ立派な鳥居が建っています。社殿をとりまく境内地は、ほとんどが植栽林で、時に神木・神苑・神池があります。次にこれらの境内地を囲むように平地林があり、原生林または極相林となっており、しばしば禁足地となっています。さらにこれらの森を抱え込むのが山林で、そこは二次林または混合林となっています。

## 事務局から

- 会員名簿を作成中です。原則として氏名と住所のみを掲載しますが、ひと口欄として 10 字～20 字のコメント(例えば鎮守の森の写真を撮っている。森の調査をしている。神社めぐりをしている。環境問題に取り組んでいる等々)をいただきたく、3 月末までに FAX、E-Mail など事務局にご連絡下さい。なお、住所も都道府県のみを希望される方はできるだけ早くご一報下さい。
- 平成 15 年度(平成 15 年 4 月～平成 16 年 3 月)の会費の振込用紙を同封させていただきました。継続が確認でき次第、平成 15 年度の会員証をご送付させていただきます。
- 学会誌「社叢学研究」(3 月末刊行予定)の進行が予定よりやや遅れています。現会員の方々には必ずご送付致しますので、もう少しお時間を下さいますようお願い致します。
- 5 月 24 日・25 日に東京の國學院大學を会場に開催する第 2 回社叢学会総会ならびに大会の

準備が着々と進行しています。前号で募集しました研究発表者の選考も終わり、大会当日の発表が楽しみです。総会ならびに大会のスケジュール等につきましては次号で詳しく予告致します。

## 編集後記

メーリングリストを立ち上げて鎮守の森だよりを流したり研究会案内をすると郵便代が節約できる！ さっそく愛用のパソコンをぺこぺこ叩いて ML を立ち上げ、参加会員の募集開始。目下、25 人の会員の方が登録してくださっている。とゆーことは 1 回につき 2 千円の節約かあ… 登録ご希望の節は事務局にアドレスをお知らせ下さい！

でもね、純粋アナログ人の I 事務局長、「じゃあ僕、写真撮ってきます！」とおっしゃって下さるのはありがたいんだけど、出来上がりはと一ぜん紙に焼いたアレ。ML 版「鎮守の森だより」は従って、写真ナシです。だって、スキャナないんだもん。

(藤岡 郁)

発行人 社叢学会事務局 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NS ビル 5 階

TEL/FAX06-4790-0155 E-Mail [jim@shasou.org](mailto:jim@shasou.org)

社叢学会関東支部 〒171-0021 豊島区西池袋 2-36-1 ソフトタウン池袋 1101

TEL03-5950-6507 FAX03-5950-5184 E-Mail [shasou@macrovision.co.jp](mailto:shasou@macrovision.co.jp)